

主の変容

福音朗読 マタイ 17・1-9

2023.8.6 9:30 ミサ
カトリック高円寺教会
主任司祭 高木健次神父

マタイ、マルコ、ルカの福音書を読みますと、イエス様はご自分の公生活、宣教活動の前半はガリラヤで神の国の福音を宣べ伝え、そしてそののちにエルサレムに向かって旅をされ、エルサレムで十字架に架かれたという流れになっています。

ガリラヤはエルサレムから一番遠い、国境の地方です。ですから、エルサレムの大祭司や律法学者の力が、ないわけではないけれども、そこまで強くない。だからこそ、ユダヤ教のイエス様だけではない色々な分派がガリラヤにはあったと言われています。そういう意味で、イエス様がガリラヤに留まるということも選択肢としてはあったわけです。12人の弟子やご自分を信じる、従う人たちだけで新しい共同体を作る。そこだったら安全で、イエス様が十字架に架かるということもなかったかもしれません。

しかし、「全ての人を招く」という父である神様のみこころを表わすためには、イエス様は自分を受け入れた人とだけ留まるというわけにはいかなかったわけです。自分に反対し、迫害し、十字架に付ける、そのような人に対してでも、イエス様のほうからは絶えず繋がりを保とうとされる、そのために、ガリラヤに留まるのではなくエルサレムに向かわれる。その決断なんです。自分を受け入れる者とだけ留まるのか、そうではない異なる者との繋がりにも開くのか。この問いの中で、後者を選んだ。それが父のみこころなんだ、父のみこころを表わすためにはそうしなければならない、というわけです。

ご自分が何をすべきか分かり、そして父のみこころを行おうとする、その者には、神様の助けがある、必ずあるということが今日の変容の、まさに神の栄光の姿のイエス様の中に示されていると言って良いのではないかと思います。

そして、わたしたちもそのイエス様のあとに従う。「これはわたしの愛する子、わたしの心に適う者。これに聞け」(マタイ 17:5) という父である神様のことはわたしたちにも向けられていると受け取るならば、それはただ単に空間的にエルサレムに行くということではなく、自分と気が合う者、意見を同じくする者、心地よい状態に留まりそれを護ろうとするのではなく、全ての人、自分と合

わない者にも開かれるようにすることです。イエス様の十字架の姿、たとえ相手が自分を傷つけようともご自分からは閉ざさないというのがその死と復活、十字架の死と復活に表されたイエスの、そして父である神様のみこころであると言えることができます。

世の中、今の現代社会を見れば——これは昔からかもしれません——人類が色々に分断されていていっている、異なる意見の者、異なる価値観の者を敵とみなすという傾向が強まっているように見受けられます。しかし、キリストに呼ばれ、そして従うと自覚する者はそのような風潮に飲み込まれてはならない、ということなのだと思います。

一人ひとりの個人的な対人関係から始めて、社会の、そして国と国、世界の、そういう色々なレベルにおいて、信仰者がその分断に拍車をかけるのではなく、分断された人と人とを繋ぐ、そのような役割を果たすことができるよう、わたしたちの力は弱いけれど、神様の導きのうちに為すべきことができるように恵みを願いたいと思います。

今日から、日本の教会においては平和旬間が始まります。平和旬間、去年に引き続き今年も東京教区では関係の深いミャンマーの教会が今軍事政権の下で教会も含めて色々迫害されていて、国内で避難している方々がいる、そういう人たちの支援をミャンマーの教会が行っている、そのための献金に当てるといことです。このミサのあとにキム委員長が現在のミャンマーの状況についてお調べになったこととお話しくださいますので、是非多くのかたが残って聞いてくださればと思います。

わたしたちは信仰者として平和に取り組む、その時にカトリック教会のカテキズムにある表現を思い起こしたいと思います。カテキズムには、「わたしたちは正義を行っているつもりで実際には状況を悪化させているに過ぎない暴力と現状を変えることをあきらめる怠惰の間の細い道を通らなければならない」と、カトリック教会の教えは述べています。正義の名のもとに相手を非難し排斥し続ける暴力でもない、「しょうがないんだ」と言ってあきらめる怠惰でもない、対話の道。それは細い道であると教会は認識しております。しかし、その道を通らなければならない。それがイエス様の十字架の死と復活の道でもあるわけです。

わたしたちがそれぞれの場において、またレベルにおいて、キリストに従う思いを新たにし、そのための恵みを頂く、そのためだったら神様はいくらでも助けてくださる、その信頼を新たに、このごミサをお捧げしたいと思います。